

特集

戦後史のなかのアジア・太平洋戦争

今年になって、日中関係上の事件が発生し、世情を騒然とさせている。いわゆる「冷凍ギョーザ中毒事件」において一部にみられる過剰なまでの反応の根底には、歴史認識、とりわけ戦争認識の問題が暗然と存在しているといえよう。一方で、この事件は、食糧貿易を通じて日中両国の密接な経済関係を改めて示したのもであった。こうした情勢のもと、日本海に面し、かつ全国的にも異例な「大東亜聖戦大碑」が存在する石川における戦争認識が持つ意味は、決して小さいものではないだろう。

本特集では、全国各地の護国神社を見渡しても希有の存在である「大東亜聖戦大碑」をめぐる主張を皮切りに、戦争認識を考えるうえで貴重な題材となりうる論考を掲載する。



金沢大学経済学部
講師

小林 信介

石川から問う戦争観

今回の特集は歴史認識、戦争観という、一見すると本ニュースレターには馴染まないテーマである。だが昨今の経済環境を見たとき、この問題は避けて通ることが許されない。小泉首相時代、「政冷経熱」とも評された日中関係であるが、それが嵩じて「政冷経涼」にまで陥りつつあると日中両国から懸念が発せられる事態となり今日に至っている。「冷」や「涼」の根元は、いうまでもなく歴史認識問題であり、その多くが1945年に終結した戦争に対する日

中両国の認識の隔たりに起因している。日中間に横たわるこの問題は、日韓、そして日本と北朝鮮の関係においても確認できる。

それを踏まえ改めてここ石川県を見渡したとき、この問題を考える格好の題材が存在していることに気付く。石川護国神社社域に建立されている石碑「大東亜聖戦大碑」がそれである。この碑は2000年8月に建立された。かの戦争を「聖戦」として顕彰したその巨大な石碑は、全国各地の護国神社を見渡しても希有の存在である。空襲被害がなかったことなどから、石川県において「戦災」がなかったかの様に語られる傾向がある。小学校低学年向けの「平和教育」の題材に、石川ではなく富山の空襲が採り上げられているのはその証左である。しかし碑をめぐる環境は、七尾での強制連行裁判、中国残留邦人の帰国定住問題などと同様に、またはそれ以上に、かの戦争と石川県が決して無縁ではないこと、そして

特集 戦後史のなかのアジア・太平洋戦争

石川から問う戦争観

金沢大学経済学部 講師 小林 信介・・・①

大東亜聖戦大碑と私の歴史観

大東亜聖戦大碑建立委員会実行委員長 中田 清 康・・・②

「大東亜聖戦大碑」がもつイデオロギーと現代社会

金沢市民 山口 隆・・・⑤

ヒロシマの被害と加害に関する一考察

—平成3年の平和宣言を題材に—

広島大学文書館 助教 石田 雅 春・・・⑦

天皇制とアジア・太平洋戦争の記憶

—城山三郎『大義の末』から—

京都大学文学部 助教 河西 秀 哉・・・⑪

特別寄稿 【随想】巨大地震で被災発電停止した
原子力発電所の再開について思う

岡本水文・河川研究所 所長
工学博士 岡本 芳 美・・・⑬

また、どうする中心市街地

学生の「まちづくり」への関わり

金沢大学大学院人間社会環境研究科
社会システム専攻博士前期課程1年 田 中 悠・・・⑯

戦後半世紀を優に超えた今日に至るまでなお未決着な戦争認識問題の存在を我々に教えている。

そこで我々がこれを考察するために、碑の建立側より中田清康氏、反対し続けている側より山口隆氏と、「聖戦大碑」を挟んで両極の立場の方に論考を寄せていただいた。なお両氏ともに直接間接に言及しておられるが、「聖戦」の本源は天皇制にある。

「聖戦大碑」が示す戦争認識問題を考察するには、天皇制や天皇の戦争責任についての考察もまた不可避であろう。これに関して、河西秀哉氏（京都大学文書館）に論考を寄せていただいている。また、戦争認識問題をめぐっては、民衆レベルにおいても被害のみならず加害の側面から捉え直そうとする動き

が日本各地で起きている。その一例として、広島大学文書館の石田雅春氏には、ヒロシマにおける被害と加害についてまとめていただいた。

最後に、この特集では中国や戦争などの呼称について、寄稿者の表記に一切の校正を加えていないことを申し添えておく。呼称もまた寄稿者の立場を明確に表わしており、それへの校正は寄稿者の主張を歪曲することになるためである。それぞれの主張をありのままに掲載し、読者諸賢に戦争認識問題を考える上での題材を提供すること、これが本特集の最大の目的である。それが達成されるか否か、その責任は編集をつとめた私に帰するが、諸賢の判断に委ねたい。



大東亜聖戦大碑
建立委員会実行委員長
中田清康

大東亜聖戦大碑と 私の歴史観

我が国の現状を見ると、尊貴な祖国を冒瀆する醜状は目を覆わしめるものがあります。日本の真価は、悠遠の歴史と輝く伝統であり、祖先以来営々と培われてきた祖国の足跡と、業績への誇りであります。その忘れてはならない日本的価値が、老獪なる占領政策によって歪曲否定され、それに迎合する国内反日勢力と、これを利用する近隣諸国の策動によって、年とともに見失われてゆきました。このまま推移するならば、愛国心喪失、道徳荒廃によって、病根は日と共に深まるばかりであります。

これを憂え、私たちは昭和37年、「日本をまもる会」を発足させ、祖国の真価を護持・顕現すべく努力して参りました。ところが近年に至り、大東亜戦争を侵略・加害者の立場で捉える敵国史観が猖獗する惨状となりました。誇るべき自国の歴史を忘却・否定することは、国家の名誉を傷つける最も愚かなことであり、諸外国からも軽蔑されていることも判らず衆議院で謝罪決議をやり、首相までが亡国の精

神状態でベコベコするばかりであります。

我が国の前途について、悲観と絶望の織りなす昨今ですが、この謀略に深く毒された恥ずべき状態を解毒・克服するため、大東亜戦争と日本の真姿をすべての人々に訴えると共に、長く後世に遺すべく、私共は聖戦大碑建立を決意しました。大東亜戦争こそは民族の総力戦であり、勝敗を越えて日本歴史の精華が凝集したものであります。一挙に欧米植民地勢力を撃壊した緒戦の戦果、全戦線における玉砕戦の壮絶とあいつぐ特攻突撃、玉音放送と共に行われた整然たる終戦にみる天皇の御稜威、戦中から戦後にかけて起こったアジア独立の波及はアフリカにも及び、史上前例を見ない世界変革の遺産と業績を残しております。この偉業を讀え、素晴らしい真実を迷える現代に伝え、末永く子孫に残すべきことは、私共の重大なる責務であります。

大東亜戦争は平和を希う我国が、共産主義謀略と欧米侵略諸国の挑発によりやむなく立ち上がった自存自衛の戦いであります。衆寡敵せず敗れたが、結果的にはアジア諸民族開放の宿願が達成されました。戦いに敗れ悲願がかなえられたためしは、古今東西人類史上曾てその例をみません。タイ国のククリット・プラモード首相が新聞記者当時、「日本は身を滅ぼして仁をなした」と述べていますが、けだし至言であると思います。以上から、天意天命による戦いであったとする以外に道はなく、聖戦たる所以も